

吉田裕史

Kirofumi Yoshida ■ 指揮者

ボローニャを本拠にイタリア全土と日本、ウクライナで活躍するオペラのスペシャリスト、吉田裕史（指揮者）と冬の東京で10年ぶりの再会を果たした。最後に会ったのはコロナ禍以前の2016年9月。日本の文化遺産とヨーロッパの舞台芸術を結びつける「ジャパン・オペラ・フェスティバル」（さわかみオペラ芸術振興財団主催）第2回公演、ブッチーニの《トゥーランドット》を奈良の平城京跡で観た折



の終演後だった。久しぶりに面と向かって話した吉田は身振り手振り、表情の動きが一段と大きくなり、すっかり「イタリアのマエストロ」に変貌していた。

東京音楽大学から欧州へボローニャで「シエフ」に就任

東京音楽大学指揮科研究コース在学中の1993年と95年、2度にわたるウィーン短期留学を除くと、吉田のヨーロッパ生活は1999年に始まった。

「スウェーデンのマルメ劇場には1週間だけで、ドイツのミュンヘンに向かいました。そこでの3年間はマンハイム国民劇場の音楽総監督（GMD）でバイエルン州立歌劇場の常任指揮者（カベルマイスター）も務めていた。準・メルクルさんのアシスタントです。次いでローマに8年、マントヴァに3年、2014年からはずっとボローニャに住んでいます」

日本人の指揮者がイタリアの歌劇場やオペラハウスで「シエフ」ポストを得るのは不可能と言われてきた中、吉田は2010年にマントヴァ歌劇場の音楽監督に就く。日本人初の快挙だった。

『ロビーニョのマエストロ』オペラは出演者との「闘争」

2013年のヴェルディ（生誕200

「ヴェルディの心を振れる日本人」イタリアで積み上げたオペラのスキル

年）イヤー。吉田はマントヴァで《リゴレット》を指揮した。テノールの有名なアリア（風の中の羽のように）を歌う登場人物はマントヴァ公爵だから、ご当地ものといえるオペラだ。「日本人にヴェルディが振れるのか？」と向けられる好奇の視線だけでもプレッシャーなのに、主役のバリトンが急ぎよ替わり、リッカルド・ムーティの指揮でもリゴレット役を歌ったベテラン歌手がやってきた。

「彼より指揮者の方が作品を知らないとみなされて当然でしたし、レパートリー上演のリハーサルは立ち位置

◀ボローニャ・フィルとの公演



などの確認（場当たり）が30分程度あるだけ。バリトンは「俺に合わせて指揮すればいい」という態度。本番でも見せ場のアリア（権力に媚び、へつらう者どもめ！）は徹底して彼のテンポにこだわります。オーケストラの連中は「さあ、どつちに付こうか？」と考へながらニヤニヤ。私は生まれて初めて「俺に合わせる！」と胸をたたく、アリアの最後近くまでズレたままで振り続け、最後まできっちり合わせました。オペラはとことん闘いだ」と思った瞬間です」

イタリアでは指揮者の手綱捌きにも独自の伝統があり「フリーズの歌わせ方、ヴェルディのズンパッパの繰り返しの弾ませ方などは楽譜に書かれていない重要な要素。イタリアの「イン・テンポ」は揺れるのです」と、吉田は極意を語る。ローマ歌劇場やボローニャ歌劇場、カラカラ浴場跡の夏のオペラ公演など吉田のキャリアに重要な節目を提供した劇場支配人のプロフェッショナル、フランチェスコ・エルナーニからは「舞台上を常に見る」と何度も注意された。「オーケストラは作品をよく知っているのだから、彼らを見て振っても意味がない。とにかく歌手との「コレスポンデンスを外してはならない」と、

エルナーニは言い続けた」と語る。ボローニャ歌劇場、モデナ「バヴァロッティ・フレニー」歌劇場それぞれのアートディレクター（フィルハーモニー）の首席指揮者も歴任して日本へのツアーも重ねるうち、いつしか吉田は「日出づる国のマエストロ（Maestro del Levante）」と呼ばれるようになった。

イタリア&ウクライナで活躍 母国で国産のオペラを！

コロナ禍の2020年12月にはブッチーニの《蝶々夫人》を指揮してウクライナ国立オペラ歌劇場にデビューした。この成功を受け、2021年に首席客演指揮者に就任したが、パンデミックのため指揮予定はたびたび延期。そこに突然、ウクライナ侵攻（2022年2月24日）。

「ひとりの音楽家としてウクライナの皆さんを支援します」と公式に表明した上で、重責を引き受けた。「客演するたびにオーケストラの楽員も戦場に駆り出され、どんどん減っていく状況に直面しながら、2023年9月には徒歩でモルドヴァの国境を越えてオデーサ入り、シーズン開幕公演の《ラ・ボエーム》（ブッチーニ）を成功に導き、2025年2月末にはクラウドファンディングで2000万

円以上を集め、オーケストラの日本ツアーも実現した。吉田の脳裏には、第二次世界大戦中のリトアニアで『命のビザ』を書き6000人以上のユダヤ人を救った外交官、杉原千畝氏が身を挺して選んだ（人道）の文字が浮かび、「極限の状況にあっても音楽を通じて人々を支え、希望を届けよう」との決意に至った。

私たちの希望はもう少し控えめで、吉田が指揮するオペラをもっと頻繁に母国の日本で聴きたいと思う。「そのためには一刻も早く、日本語で書かれ、若い人たちもゾクゾクと生理的な快感を味わえるオリジナルのオペラ作品（コンテンツ）が必要です。オペラほど「エモい」芸術はめったに存在しないのですから」

吉田の夢はまだ、途上にある。



※吉田裕史の書籍「魂の音楽よ、日本に届け」の読者プレゼントあり⇒P33

Profile

よしだ・ひろふみ
指揮者。北海道生まれ、千葉育ち。東京音楽大学指揮科、同研究コース修了。1999年、文化庁派遣芸術家在外研究員として渡欧、バイエルン州立歌劇場等で研鑽。2007年ローマ歌劇場カラカラ野外劇場にて、日本人初のオペラ指揮者としてイタリア・デビュー。2014年、ボローニャ歌劇場フィルハーモニー芸術監督に就任。現在は、モデナ・バヴァロティ歌劇場フィルハーモニー音楽監督、ウクライナ国立オペラ歌劇場首席客演指揮者。2024年、文部科学大臣賞表彰。